

ひとはくトピックス

1

ひとはく研究員とともにミツバチ研究

～第 57 回日本学生科学賞兵庫県知事賞を受賞

平坂優衣さん(小林聖心学院中学校 3 年生)は、大谷剛名誉研究員の指導で、「ミツバチの巣室の形の謎を解く」という研究を行って、第 57 回日本学生科学賞(平成 25 年度)兵庫県審査会で兵庫県知事賞を、さらに中央審査会では日本科学未来館賞を受賞しました。平坂さんはひとはくセミナーをきっかけに大谷さんと知り合い、大谷さんの指導で、ひとはくの研究施設なども利用しながら、独自の発想の研究を進めて来ました。

また、共生のひろばでトビケラの発表している県立香寺高等学校 自然科学部も「モンカゲロウ遡上飛行のしくみ」の研究で、兵庫県審査会で知事賞、中央審査会で2等入賞を受賞しました。

ひとはくと関わりを持った中高生たちの研究活動が評価されることは非常にうれしいことで、今後も若い力が伸びるようひとはくの活動を展開したいものです。

(自然・環境再生研究部 鈴木武)



(左上) 知事賞を受賞した平坂さんと指導した大谷
名誉研究員

(左下) 平坂さんが制作したミツバチの巣の模型

(右上) 知事賞を受賞した香寺高校自然科学部
[中央左から藤原さん、西さん、原田さん]

2

兵庫県立有馬富士公園における住民参画型公園運営 支援の成果をまとめた論文が日本造園学会賞受賞

兵庫県立有馬富士公園開園前の 1999 年からひとはくとの連携はスタートしました。兵庫県が住民参画型の公園運営をめざし策定した運営計画は、中瀬副館長(当時)を中心に多くのひとはく研究員が関わり、しくみづくり・人づくりの実践的研究が始まりました。住民、行政、専門家等が集って、公園のことを決める協議会、住民グループが企画・実施する「夢プログラム」といったしくみが継続して運用されています。ひとはくはそのような実践に取り組む現場職員を 10 年以上にわたってサポートしています。その中で藤本研究員は、しくみの立ち上げ、運用のプロセスや夢プログラム等の成果、住民意識の変化などを調査・研究し、2011 年度「都市公園における住民参画型運営」としてまとめ、大阪大学大学院工学研究科から学位を取得し、2013 年には日本造園学会賞を授与されました。現在も有馬富士公園はひとはくの重要な連携施設であり、多くの研究員がセミナーや研究で連携しています。

(自然・環境マネジメント研究部 藤本真里)



3

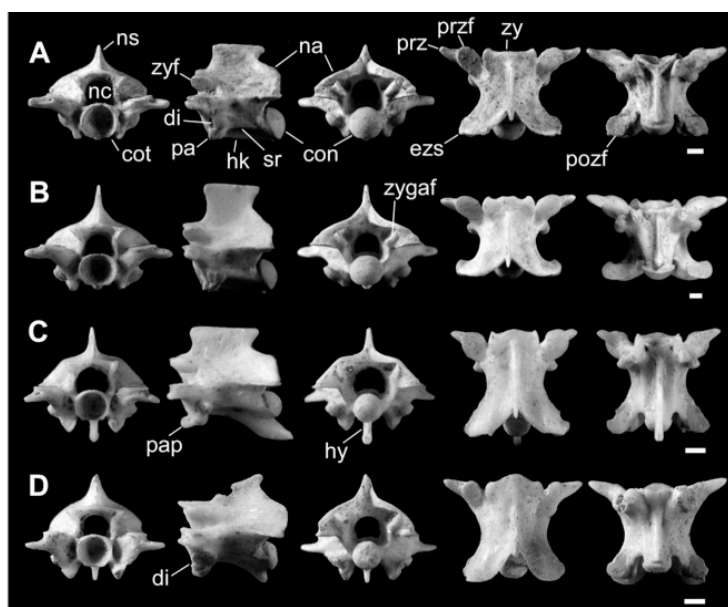
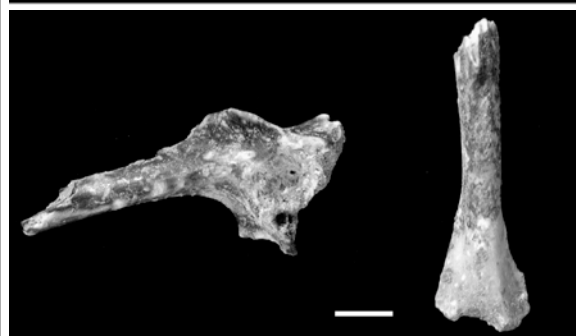
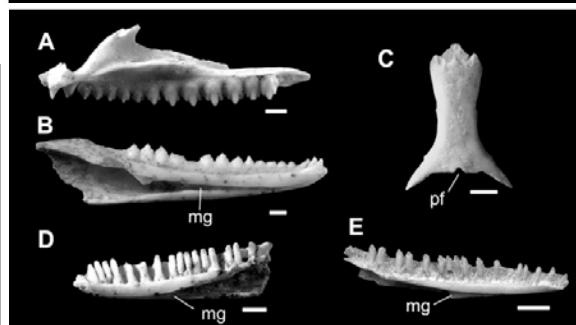
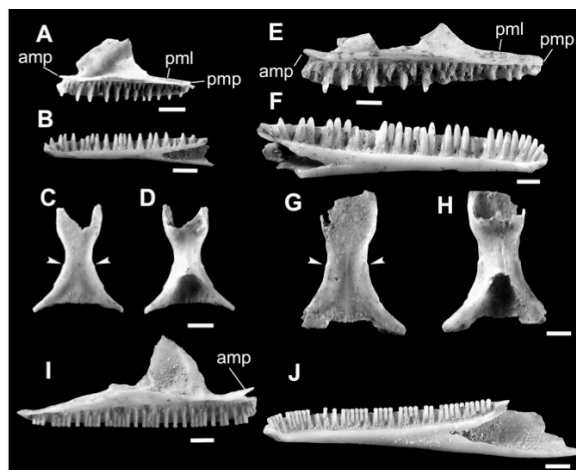
いまそこにある絶滅：与論島の在来性爬虫・両生類の場合

鹿児島県奄美諸島の南端に位置する与論島には現在、陸生ヘビ類1種、トカゲ類3種、カエル類3種の計7種のための陸生爬虫・両生類が在来分布している。ところがこの島の20世紀のものと思われるゴミ捨て場跡より収集された脊椎動物の骨格残骸を高い精度で同定したところ、陸生ヘビ類3種、トカゲ類7種、カエル類4種、計14種分もの残骸が含まれていた。このうちの丁度半分を占める計7種の爬虫・両生類が現在、与論島にまったく見られないことの原因としては、1950年代中頃から1960年代にかけて、ネズミ退治を目的に同島に導入され定着したニホンイタチによる、捕食圧の下での絶滅が考えられる。今回の調査研究の結果は、有史以降、ごく短期間で島嶼の爬虫・両生類の多様性が失われた顕著な例となるが、このような内容が日本国内で物証とともに確認されたのは初めてである。また今回の発見は、外来性捕食者の島嶼への持ち込みが、在来の動物相にもたらす危険性をあらためて強く示唆している。

(太田英利 主任研究員/自然・環境マネジメント研究部長)

共同研究者：中村泰之 琉球大学熱帯生物圏研究センター 博士研究員；高橋亮雄 岡山理科大学大学院理学研究科 准教授

出典：Nakamura, Y., A. Takahashi, and H. Ota. 2013. Recent cryptic extinction of squamate reptiles on Yoronjima Island of the Ryukyu Archipelago, Japan, inferred from garbage dump remains. *Acta Herpetologica* 8: 19–34.



与論島で発見された骨格残骸。左、ヘビ類。右上、ヤモリ類。右中、ヤモリ類以外のトカゲ類。右下、オキナワアオガエル。

4

ひとはくフェスティバル、新たな展開へ

ひとはくフェスティバルは、より多くの人々にひとはくに足を運んでもらおうと 1996 年にスタートしました。2013 年まで 18 回実施し、総ビジター数 383,250 人です。直近の 2013 年はビジター数 23,823 人で、博物館やその連携グループ、ひとはく連携グループ合計 25 グループとひとはく研究員、フロアスタッフで 35 のプログラムを実施しました。多くの博物館関係グループの出展は、10 周年(2002 年)の記念的フェスティバルのときに人と自然の会から全国の博物館ボランティアによびかけたことがきっかけでした。これらのネットワークをさらに深めるために、大規模になったひとはくフェスティバルを終了し、連携するグループと密な連携ができる事業をさらに推進しようと考えています。すでに、2003 年からはじまったキャラバン事業では、多くの地域にでかけ、研究員をはじめとする館員を face to face で知っていただき、さまざまなグループとの連携も実現しています。2012 年度からは、移動博物館車「ゆめはく」を導入し、より多くの地域に出かけ、新

たな仲間との出会い、連携
が生まれることを期待してい
ます。

(生涯学習推進室 副室長
藤本真里)



5

今年から本稼働、「ゆめはく」の活躍

ひとはくの開館 20 周年を記念して 2012 年秋に作られた移動博物館車「ゆめはく」は、2 年目を迎えて本格的な稼働が始まりました。

ゆめはくは県内各地で開かれたさまざまなイベントなどに出展するほか、東日本大震災の復興支援のため、岩手、宮城、福島各県を訪れました。11 月のひとはくフェスティバルの時には、しぜんかわらばんやキッズかわらばんの表

彰式も、ゆめはくを台にして行われました。

その稼働日数は、遠方への移動日を除いても延べ 50 日を超えています。

ゆめはくは、恐竜化石のレプリカや昆虫の拡大模型など、大型の資料や機材を運び、ゆめはくの中では展示、外では展示やワークショップを展開する方法で活用されています。東北キャラバンで仙台市の会場から福島市の会場に移動する時には、大量の機材を荷室いっぱいに積み込み、荷物輸送にも大きな力を発揮しました。

(生涯学習推進室 ゆめはくマネージャー

古谷 裕)



ひとはくキャラバン in 姫路 姫路市立南大津公民館



ひとはくキャラバン in 姫路
姫路市立南大津公民館



ロハスミーツ明石 明石公園



ロハスミーツ明石 明石公園



ひとはくフェスティバル しぜんかわらばん・キッズかわらばん表彰式



梁川天神社 福島県伊達市



大量の機材を積み込んだゆめはく
宮城県仙台市

6

子ども・親子向けプログラムで「Kids サンデー」にぎわう

ひとはくでは、前年度から毎月第一日曜日を「Kids サンデー」と呼び、小さな子どもや親子向けのプログラムを実施（年間 9 回）しています。この日は、フロアスタッフや研究員のオープンセミナー等と、NPO 法人 人と自然の会をはじめとする「ひとはく連携活動グループ」の皆さんにも参加いただいて毎回 10 テーマほどのプログラム（たとえば、パネルシアター、サイエンスショー、デジタル紙芝居、わくわくネイチャー・テクノロジー「自然って、すごい！」など）を行いました。この「Kids サンデー」を楽しみに来館してくれる家族連れも増えて毎回到ぎわいました。（キッズひとはく推進タスクフォース リーダー 小舘誓治）



写真1 Kids サンデーの日のエントランスホール前



写真2 Kids サンデーのポスター



写真3 生物多様性フロア(2階)での様子



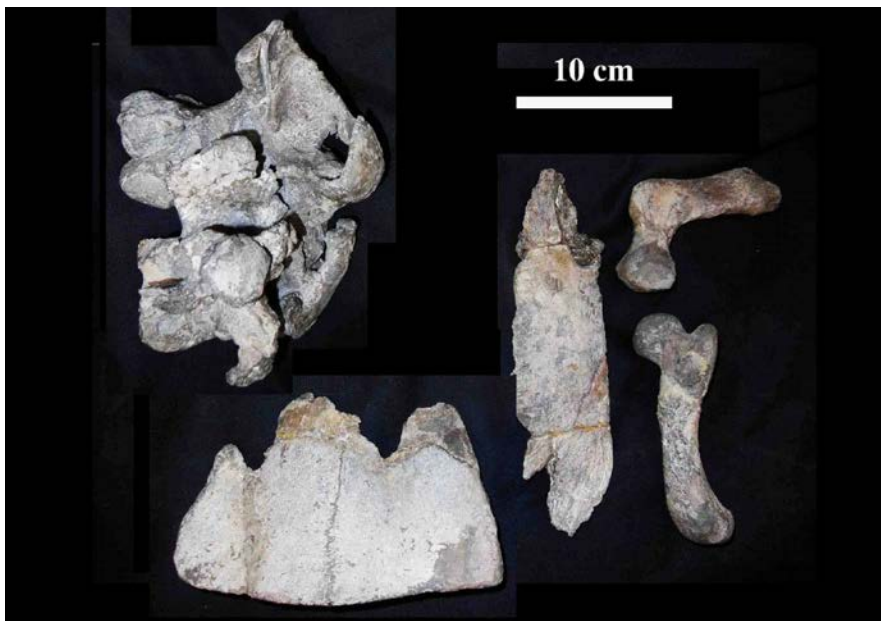
写真4 実習室(4階)での様子

7

白亜紀のオサガメ類の化石を発見

兵庫県洲本市由良町(淡路島)に分布する和泉層群北阿万層(白亜紀後期:前期 Maastrichtia, 約7千万年前)から岸本眞五氏(姫路市、当館地域研究員)と松本浩司氏(愛媛県)によりウミガメ類の完全な頭骨を含む体骨格化石が発見されました。これらの化石は、日本固有の絶滅種である *Mesodermochelys undulatus* と考えられます。本種の化石はこれまで北海道の函淵層群・蝦夷層群(白亜紀後期)、香川県および兵庫県の和泉層群(白亜紀後期)からしばしば報告されており、体の骨格の特徴から白亜紀ではまれなオサガメ科に属することが判明しています。しかし、これほど完全な頭骨の発見は初めてであり、本種の形態的特徴をより詳細に明らかにするとともに、ウミガメ類、とくに白亜紀オサガメ類、の形態進化や古生態の解明に大きく寄与するものと期待されます。今回の化石の発見については、日本古生物学会第163回例会において平山廉氏(早稲田大学国際教養学部 教授)により発表されました。

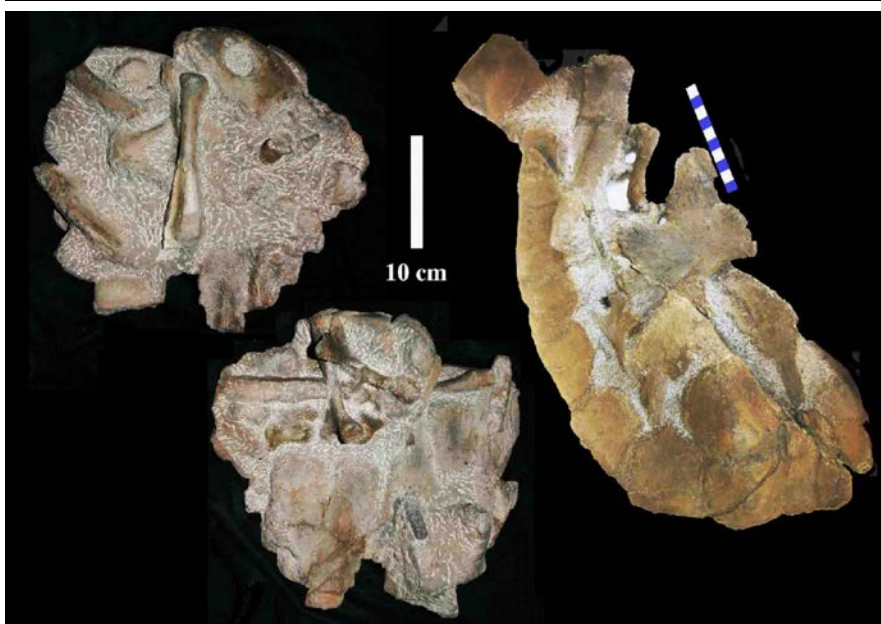
(自然・環境評価研究部 三枝春生)



和泉層群産ウミガメ類化石

上: 第一標本

下: 第二標本



8

ひとはく生物多様性事業 in たんばを開催

日本の森とボルネオ島の熱帯雨林の違いなどについて、体験を通じて学ぶことにより、生物多様性や地球環境問題について自分自身の問題として考えるきっかけとするとともに、国内の異年齢の子ども達やマレーシアの同年齢の子ども達と友好関係を深め、自然や人を大切に、たくましく生きる子ども達の育成をめざして、2013年7月30日～8月2日の期間、小学生7名、中学生9名、高校生1名合計17名の参加を得て、丹波少年自然の家を拠点に「ひとはく生物多様性事業 in たんば」を実施しました。河合名誉館長やひとはく研究員から日本や熱帯雨林の生物多様性の実態について講義を聴いて学んだり、自然の家の周辺の森へ入り、水生昆虫の捕獲や観察、植物の採集や分類などを研究員らとともに体験実習をしました。また兵庫県立コウノトリの郷公園、豊岡市立コウノトリ文化館、玄武洞公園NPO法人日本ハンザキ研究所など、但馬地方の自然について現地学習および丹波市内のちーたんの館、青垣いきものふれあいの里を訪れ、丹波地域の自然や恐竜化石などについて学びました。最終日、ラハダトゥ・サイエンススクールの生徒たちは、高井芳朗兵庫県教育長を表敬訪問しました。（生涯学習課 八尾滋樹）



「ひとはく生物多様性事業 in たんば」の実施風景

9

関西広域連合生物多様性保全施策の策定に 幹事館として参画

兵庫県も参加する関西広域連合には生物多様性の課題を所管する広域環境保全局が設置されており、平成 24 年度から平成 28 年度にかけての 5 カ年計画である環境保全計画が策定されています。

本計画では 5 つの戦略が掲げられ、その一つである「自然共生型社会づくり(生態系保全)」では特に(1)広域的な鳥獣保護管理等、(2)生物多様性に関する情報の共有・一元化と流域全体での生態系サービスの維持向上の2つの課題に取り組むこととされています。

工程では、平成 24 年度から平成 25 年度のフェーズ I と平成 26 年度から平成 28 年度のフェーズ II の 2 期に分けられ、フェーズ I では課題(1)、フェーズ II では課題(2)に着手することが予定されています。特に課題(2)については、博物館ネットワーク等を活用した関西地域における生物多様性に関するデータベースの共有化等を図るよう定められていたため、平成 26 年度からの具体的な事業の実施にあたっては、平成 25 年度の予算要求資料作成段階から広域連合参画自治体の博物館と協議していきたい旨、広域環境保全局事務局(担当:滋賀県)から当館に相談が持ちかけられました。

これを受けて、年度当初より数回の協議を重ね、事務局と当館の共同で予算要求資料素案を作成しました。更に大阪市立自然史博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、和歌山県立博物館、徳島県立博物館をはじめとする主要な自然史系博物館に呼びかけて打合せをし、そのブラッシュアップおよび平成 26 年度から進める事業へ参画することの一定の合意を取りつけました。予算要求資料では、「生物多様性に関する情報の共有・一元化」に対応する事業として「①関西の残したい自然エリアの選定」を、「流域全体での生態系サービスの維持・向上」に対する事業として「②生態系サービスの指標開発」を提案しました。いずれも平成 26 年度事業として認められ、平成 26 年度予算として 706 万円が充当されることが確定しました。

広域連合事務局から各博物館へ個別に交渉する体制ではやり取りが煩雑となり、意志決定にも時間が煩雑な対応となるため、事業実施にあたってはこれら博物館を代表する幹事館が必要との意見があったため、事務局および他館からの推薦を受けて当館が平成 25 年度より幹事館を務めることとなりました。

ひとはくは西日本自然史系博物館ネットワークにおいて当館が中心的役割を果たしてきました。また平成 23 年度から生物多様性協働フォーラムを様々な団体と協働で実施してきました。これらのことが、ひとはくの広域でシンクタンク活動を実践する姿勢としての評価に結びつき、今回のような役目を拝命されるに至ったと思われます。今後も兵庫県下だけでなく、関西地域の広い範囲においても生物多様性に関するシンクタンク活動を展開することを当館は期待されているといえます。

(シンクタンク推進室 シンクタンク・ジーンバンクマネージャー 橋本佳延)

10

今年も盛況、第9回「共生のひろば」を開催

毎年2月11日に開催。今年度で9回目を迎えました。口頭発表13件・ポスター発表39件の合計52件の発表があり、200人を超す聴講者を迎えることができました。発表半ばには「兵庫県洲本市産ハドロサウルス科恐竜化石」を寄贈してくださった姫路の岸本眞五さんへ感謝状が贈られました。発表内容は活動テーマも活動方法もまちまち、おまけに50歳以上の差があるのに、お互いの発表を聞いていられるのだろうか？またそれぞれの活動の質を高めるためのヒントをお互いに得ることは可能なのだろうか？多くの方がまだまだ時間不足・交流不足という思いを持って会場を後にされました。既存のどんな学会よりも不思議に退屈しない「ひろば」で、この不思議な「ひろば感覚」は第1回の時と少しも変わっていません。今年は特に高校生の発表が多いのが特徴でした。初めて参加された教育学が専門の兵庫県立大学清原正義理事長・学長は、自身の小学生の頃を思い比べ、あまりに堂々とした小学生の発表態度に驚嘆。

(生涯学習推進室 共生のひろばマネージャー 田中哲夫)



天然酵母の探索と活用に関する研究—サルビアの花酵母を利用した日本酒醸造と地域産業への貢献 兵庫県立農業高校



山陰ジオパークの地形と砂と石 石ころクラブ



河合名誉館長の基調講演



洲本市産恐竜化石寄贈者岸本眞五さんに感謝状贈呈



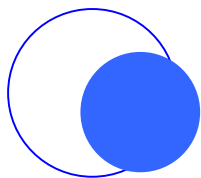
兵庫県立大 清原正義理事・学長より講評をいただく

11

古生物学会第 163 回例会をひとはくで開催

平成 26 年 1 月 24 日～26 日に兵庫県立人と自然の博物館において日本古生物学会第 163 回例会が開催されました。同学会が当館で開催されるのは1999年6月の第148回例会以来です。前回の全発表件数は49件(シンポジウムを含む)であったのに対し、今回はシンポジウム「古生代化石研究の最前線」の講演6件、学術賞受賞講演 2 件、一般講演54件、ポスター発表45件(うち高校生による発表6件)、総計107件と倍増し、一般講演会場も前回より一会場多い3会場で行われました。前回と比べると恐竜等脊椎動物化石の研究発表の増加が印象的であり、篠山層群の脊椎動物化石や淡路島のウミガメ化石もこうした流れの中に位置づけられます。開催準備期間中に事務局長が急きょ変わるという事故がありましたが、幸い多くの方々からご支援を賜り、学会を好評のうちに無事終了することができました。

(自然・環境評価研究部 三枝春生)



タスクフォース事業

タスクフォース(組織群)について

従来の組織群とは別に平成 20 年度から導入したものである。各タスクフォースは、短期の課題を達成するために結成し、構成員はリーダー、マネージャー、メンバーである。実情に応じて年度途中でも人員は変更可能で、また新たなタスクフォースを発足できるようにしている。

■ 恐竜・化石 タスクフォース

(1) 新たな発掘調査地の策定

- ・県立丹波並木道中央公園内の脊椎動物化石含有層の存在を確かめるために平成26年2月に同公園を調査した。化石含有層があると予想された同公園内駐車場の舗装を剥ぎ、露出した岩盤を検査したが、化石含有層は見つけられなかった。しかし、化石を含有すると期待される残土および地質資料を採取できた。
- ・工事が計画されている川代トンネルは篠山層群の化石含有層を横切ると予想されている。このトンネル坑入り口周辺の整地工事が始まり、掘削時に出た岩屑を調査したが、化石は発見されなかった。しかし、来年度の同トンネル掘削では化石が発見される可能性が高いので、坑内調査および化石含有岩屑の搬出および貯留場所に関して県民局土木・丹波市と協議を行った。

(2) 化石クリーニング作業、および調査研究の推進

- ・竜脚類・有鱗類の記載論文、技師の選考・育成に関する論文を投稿し、有鱗類のうち一編は出版された。
- ・洲本市内田より産出したウミガメの化石について共同研究者と学会発表をした。
- ・洲本産ハドロサウルス類が発見者の岸本氏より寄贈された。この寄贈をうけて、館外の研究者と同化石の共同研究を開始した。

(3) まちづくり推進に係る恐竜化石を活かした教育普及活動の充実

- ・丹波市ちーたんの館の企画展展示協力・監修、クリーニング指導、助言を行った。
- ・篠山市太古の市民研究所、クリーニング運営への助言、資料提供を行った。
- ・丹波市、篠山市、丹波県民局、(財)兵庫丹波の森協会、たんば恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり推進協議会との連携・協力し、丹波竜のフィギアを完成させた。
- ・丹波市および篠山市の教育関係プログラムに協力した。
- ・COC の採択を受け、県立大学の地域貢献事業として地の拠点整備事業を年度後半から開始した。その一環として丹波市および篠山市でそれぞれ一回普及講演会を行った。

(4) 展示および演示コンテンツの充実

- ・恐竜復元アーティストとの協働を丹波市が企画している復元画・フィギア作成に監修者として参加する形で進め、篠山層群生態環境復元画を完成させた。

(5) 日本古生物学会の開催

- ・日本古生物学会第163回例会(平成 26 年 1 月 24 日～同年同月 26 日)を開催した。

(6) 三田の化石発掘体験広場の活用

- ・トライやるウィーク(平成 25 年 6 月)およびセミナー(平成 25 年 12 月)にて三田の化石発掘体験広場を活用した。さらに平成 26 年度に行う三田市への返還にむけて、足跡化石の基礎データを採取した(平成 26 年 3 月)。

(7) 研究成果や事業の新聞等への報道推進

- ・7件行った。

■大学連携タスクフォース

(1) 兵庫県立大学創立 10 周年／創基 85 周年記念事業の調整

・兵庫県立大学において生涯学習を担う自然・環境科学研究所として、「共生のひろば」を表記記念事業に位置づけ、地域連携や生涯学習の特色をPRしました。当日は清原学長が来賓として来られ、全ての調査研究発表を聞かれ、講評していただいた(写真1)。

写真1

(2) 文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC 事業)」への参画

・兵庫県立大学が採択された標記事業について、丹波・但馬の地域資源を活かした地域づくりに取り組む「地域資源マネジメント系プロジェクト」と、南但馬・西播磨のむら・まちの再生に取り組む「多自然地域再生系プロジェクト」に参画した。前者は丹波市・篠山市での恐竜を活かしたまちづくりを中心に、後者は養父市の明延鉱山跡の活用(写真2)や佐用町の薬草栽培振興を中心に、地域再生エンジンとしての役割を果たすべく活動を続けていく。

写真2



■情報システム更新タスクフォース

博物館の運営・管理を支援する情報システムについて、5年間のリースによる更新を行った。これまでとは入札・契約方式を変更して、提案コンペ方式により参加企業からの提案や改善などを受けて改修した。

これまでとの改善点は、機能面での大幅な向上をはかりつつ、必要機能の厳密な精査や、適正規模のシステム開発により、経費の約50%節減を実現したことにある。主な具体的な改善点は以下の通り。1) ホームページの全面改訂(写真3)、2) セミナーや部屋予約、各種事務支援のシステムを統合化と開発・メンテナンスコストの軽減、3) WEB公開機能と連動した収蔵品管理システムの全面改修、4) オープンソースソフトウェアによる図書管理システムの全面改修、5) 一部サーバーのクラウド化と常駐SEを置かないメンテナンス体制の確保、6) 4Fひとくサロン情報端末を利用したレファレンス資料参照・展示システムの導入、7) 各種情報機器の更新、8) 館内ネットワークの再構築と無線LAN導入などが挙げられる。これらの改修によって、業務の効率化が図られたことに加えて、今後5年間の経費削減だけでなく、次期システム更新時にも大規模な改修を必要としない効率的なシステム構築が図ることができた。

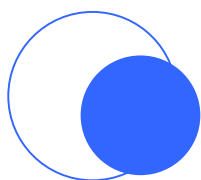
写真3



■マーケティングタスクフォース

コラボレーション組織の検討と設立

・人と自然の博物館の活動をサポートする新組織として、任意団体「ゆめはくネットワーク」を立ち上げることとした。また、設立の準備段階として、組織や規約等を検討し、試行を開始した。



平成 25 年度事業報告

人と自然の博物館では、その活動内容をよりわかりやすくかつ明確にするために、平成 14 年度から「中期目標」と「措置」を設けている。中期目標は、いわば博物館の行動の指針となる大項目であり、それぞれに達成を目指すべき目標値(指標)が設定されている。さらに中期目標各項目の下位項目として「措置」を設定し、博物館活動の活性化に資する取り組みを数値で把握するようつとめている。

- 第1期中期目標 平成 14 年度(2002 年度)～18 年度(2006 年度)
- 第2期中期目標 平成 19 年度(2007 年度)～24 年度(2012 年度)
(開館 20 周年にあたって策定したひとはく将来ビジョンを反映させるため、期間を 1 年延長)
- 第3期中期目標 平成 25 年度(2013 年度)～29 年度(2018 年度)

1-1 研究活動

研究
推進室

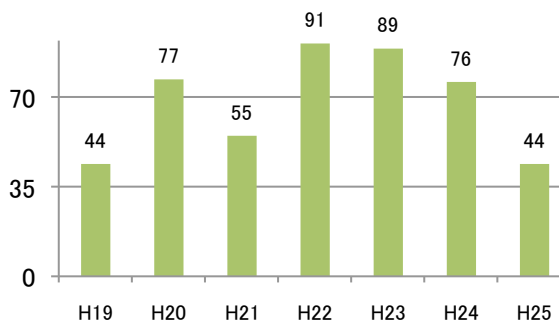
すべての活動の基礎となる研究を、引き続き精力的に遂行し、成果を還元する。

1 学術論文・図書数

学会等の査読を経て掲載された学術論文と専門図書数

中期目標：35 本/年

平成 25 年度：44 本 (126%)

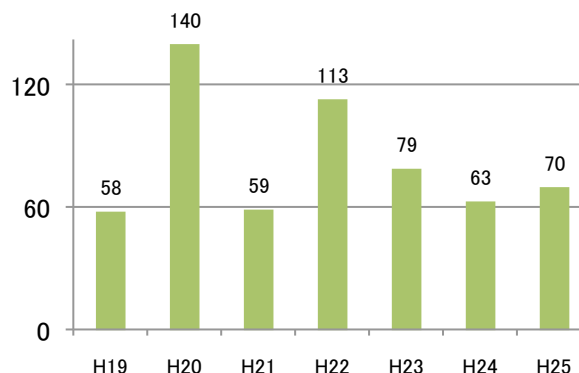


2 一般向け著書・その他著作数

論文（総説・その他）、一般向け著書、雑誌・新聞等の著作数

中期目標：60 本/年

平成 25 年度：70 本 (117%)



平成 25 年度の達成状況と自己評価

学術論文の公表数は合計 44 本となり中期目標の 35 本は達成することができた。しかしながら絶対数として平成 19 年度以来の低い数値となった。これは退職等による研究員数の減少も原因の一つであるが、論文の執筆・公表は普及・展示活動の基盤となるものであり、今後より一層の奮起が望まれるところである。一般向け著作・その他についても同様で、中期目標は達成しているが、普及活動の面からはより多くの貢献が求められるところである。

平成 26 年度の取り組みに向けて

学術論文でも一般向け著者等でもひとはく全体としての中期目標は達成されているが、研究員の間でその貢献数に大きな開きがみられ、最低限の目標がすべての研究員において達成されているわけではないことは自覚する必要がある。

1-2 資料

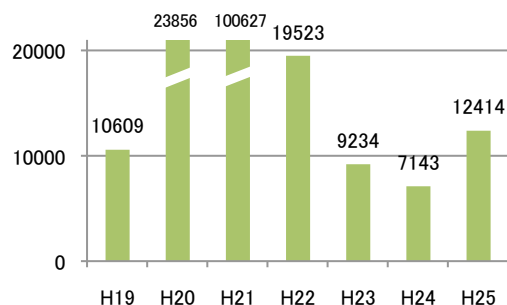
研究
推進室

特色ある質の高い資料を収集・整理し、利活用を推進する。

1 資料の登録点数

「ひとはく資料データベース」への年間登録件数

中期目標：10,000 点/年
平成 25 年度：12,414 点 (124%)



2 資料の利活用点数

館内展示・館外展示・貸出点数・マルチメディア等データ提供点数の合計

中期目標：5,200 点/年
平成 25 年度：15,693 点 (302%)



平成 25 年度の達成状況と自己評価

収蔵資料の登録点数は12,414点で、一昨年・昨年の数値よりも改善が見られ、結果として目標値を達成することができた。これは緊急雇用の予算によって既存データの電子化を優先して進めた結果である。

収蔵資料の活用は、館内展示 14101 点、館外展示 171 点、資料貸し出しが 1421 点、合計 15693 点となり、目標値を達成している。

平成 26 年度 of 取組に向けて

26年度以降は、緊急雇用による既存資料の電子データ化への人員の配置が望めない状況であり、電子データの蓄積をどのように行うかを考えなければならない。

既存資料の活用については、ゆめはくの県内全域への展開に合わせ、運搬用展示セットの開発など、より積極的な展開を行う。収蔵資料を用いた研究成果についても、少なくともひとはくに所属する研究員が出版した論文・著者については、次年度以降その状況を把握できるようにしたい。それとともに、インターネットを通じた画像等の公開についても、これまで同様に充実させてゆく。これらの取り組みを通じて、使われることではじめて価値を発揮する博物館資料・環境情報が、ひとはくに収蔵されていることの意義を伝えることが可能となる。そのためにも、良好な収蔵環境の確保が大切である。

1-3 シンクタンク活動

シンクタンク
推進室

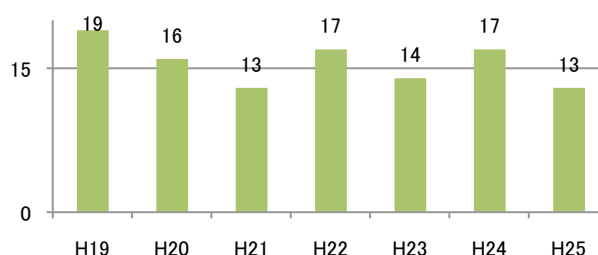
「地域資源の保全・利活用の最適化をはかる」ことを目的としたコミュニティシンクタンク活動を展開する。

1 受託件数

調査研究受託契約件数

中期目標：15 件/年

平成 25 年度：13 件 (87%)

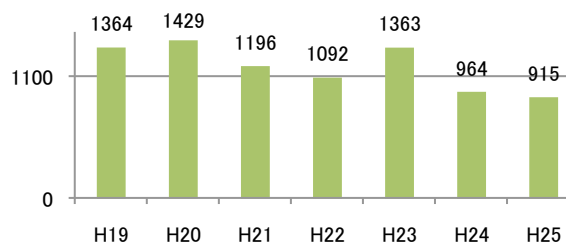


2 県政・市町行政に対する貢献度

国・県・市町関連の委員会参画数および相談件数

中期目標：1100 件/年

平成 25 年度：915 件 (83%)



平成 25 年度の達成状況と自己評価

受託研究の実施や各種委員会への参画、相談対応などを通して様々な行政課題・地域課題の解決に尽力し、これまでと同様の成果をあげることができた。また、その結果として様々な自治体との連携を強化・拡大することができた。ただし、残念なことに、上記の数値ではどの項目も目標値を少し下回る結果となった。過去の数値と比較すると、受託件数は年変動の範囲に収まっており、平均的な数値を示していることがわかる。しかし、貢献度は過去の数値よりも明らかに低く、また昨年度の数値とあわせて考えると減少傾向にあるといえるかもしれない。この原因を明らかにし、数値の改善に向けた対策を実施することが今後の課題の一つであると考えられる。

平成 26 年度の取り組みに向けて

下記のような取り組みが必要であると考えられる。

- ・企業からの受託や相談を幅広い分野において一層促進する。
- ・HP による情報発信を強化するなど様々な方法で研究委託の促進につながるようなアピールを行う。
- ・ジーンファームのさらなる活用を図り、自然再生に向けた自治体の取り組みを支援する。
- ・関西広域連合の生物多様性保全施策の推進を図ると共に、生物多様性地域戦略をまだ策定していない自治体に対する働きかけを行う。

2 生涯学習支援

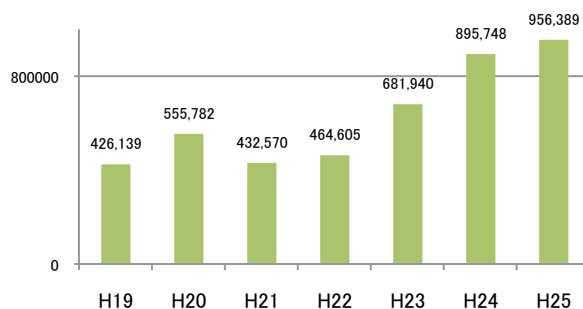
生涯学習課

好奇心を刺激する「演示」手法により、あらゆる世代に学び続ける場を提供する。

1 利用者数

総ビジター数

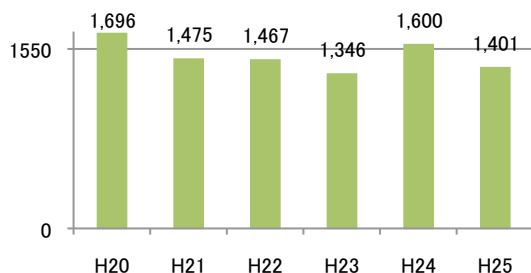
中期目標：800千人/年
平成25年度：956千人(120%)



2 生涯学習プログラム

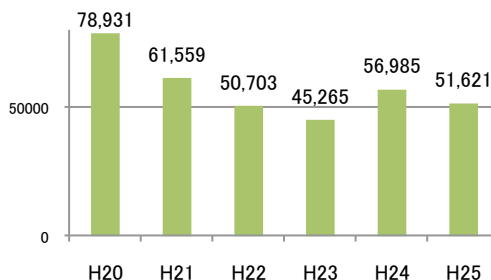
2-1. 主催プログラム実施件数

中期目標：1550件/年
平成25年度：1401件(90%)



2-2. 主催プログラム参加者数

中期目標：50,000人/年
平成25年度：51,621人(103%)



平成25年度の達成状況と自己評価

利用者数のうち総ビジター数については、第3期中期目標を20%近く上回る結果となりました。この数値には本館入館者に加え主催アウトリーチ事業および共催事業などへの参加者も計上しております。館内における主催プログラム実施件数は、「一般セミナー」＋「特注セミナー」＋「オープンセミナー」を計上し、概ね目標を達成(90.4%)できており、参加者数については目標を上回る(103.2%)ことができました。

平成26年度の取組に向けて

引き続きアウトリーチに重点をおくことで総ビジター数は継続的に増加すると考えます。館内での主催プログラムについては、実施内容(コンテンツ)の見直しと充実を図るなど、新たなプログラム開発・展開に向けた取組を推進するとともに、来館予約団体様等には積極的に特注セミナーをご活用いただけるよう促します。

3

人材育成と活躍の場の整備

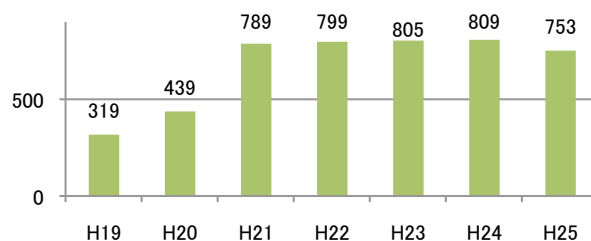
生涯学習
推進室

地域研究員・連携活動グループ等の担い手の成長を支援し、活躍の場をつくる。

1 地域研究員・連携活動グループ登録者数

中期目標：500人(H29時点)

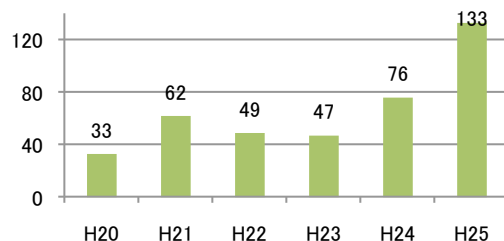
平成25年度：753人(%)



2 地域研究員・連携活動グループ主催事業実施件数

中期目標：40件/年

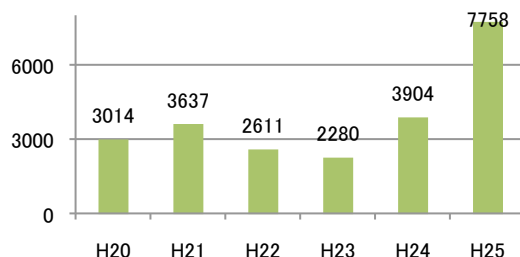
平成25年度：133件(333%)



3 地域研究員・連携活動グループ主催事業参加者数

中期目標：3,000人/年

平成25年度：7758人(259%)



平成25年度の達成状況と自己評価

本年は、地域研究員、連携グループの活動状況を担当研究員からレポート等で報告いただき、地域研究員、連携グループの状況の把握を初めて実施しました。また、連携グループ等が本館でセミナーや展示の連携事業を実施しやすくするための本館のスペースの整備も進め、多様性フロアでの演習セミナー等をほぼ毎月において実施いただきました。さらに、共生のひろば展を実施し、地域研究員、連携グループ等から口頭14件、ポスター50件の発表がありました。共生のひろば展では、伊丹市教育委員会との連携事業として小学生の発表の場を設け、また兵庫県立大学創基80周年記念事業として共同で開催する等、活動の場としての新展開にも取り組みました。

平成26年度の取組に向けて

地域研究員、連携グループの活動状況の把握から、すでに活動を休止しているグループや、担当研究員の退職や移動によって活動状況が把握できない研究員等がいることが明らかになりました。次年度以降は、地域研究員・連携グループがひととはくや地域拠点で共催・連携事業等をより良く展開できるよう活動の場や環境条件の整備を進めていくとともに、各種規定の整備を行い、ひととはくやその担当研究員との円滑な協働や意思疎通を図れるようにしていきます。さらに、担い手養成やその成果の発表の場としての共生のひろば展の新展開や新たな企画等を策定し、人材育成や活動の場の整備を実施していきます。

4 連携・アウトリーチ活動

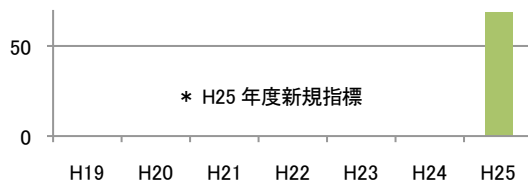
生涯学習
推進室

多様な主体と連携し、全県的に事業を展開する。

1 アウトリーチ事業

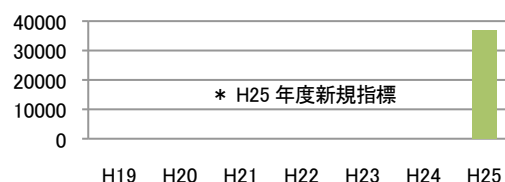
1-1. ゆめはく稼働日数

中期目標 : 50 日/年
平成 25 年度 : 69 日 (138%)



1-2. ゆめはく参加者数

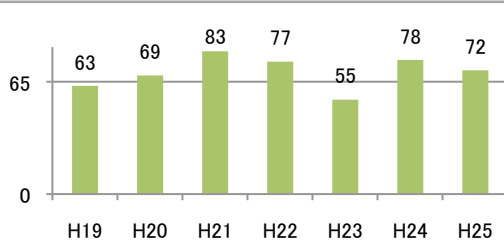
中期目標 : 10,000 人/年
平成 25 年度 : 36,885 人 (369%)



2 連携（協力・共催）事業

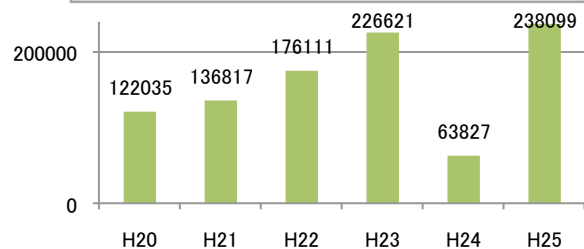
2-1. 連携事業件数

中期目標 : 65 件/年
平成 25 年度 : 72 件 (111%)



2-2. 連携事業参加者数

中期目標 : 200 千人/年
平成 25 年度 : 238 千人 (119%)



平成 25 年度の達成状況と自己評価

本年はキャラバンを 34 件（ビジター数 256,635 人）、ジオキャラバンを 5 件（ビジター数 20,019 人）、キッズキャラバンを 12 件実施しました。昨年度導入した移動博物館車「ゆめはく」号の稼働日数は目標値を達成、また昨年度改装した本館 2 階の「魅せる収蔵庫」のコンテンツもキャラバン実施に有効に活用され、キャラバンの連携先から好評価を得ることができました。さらに、本年度はキャラバン用什器、展示物の管理運用システム等の整備を実施し、キャラバン事業が円滑に展開できるようになりました。

平成 26 年度への取組に向けて

連携・アウトリーチ活動の充実を図って行く為に、新たな地域拠点形成に取り組んで行くとともに、新たに導入したゆめはく号のキャラバンでの運用方法や、その活動を支える「ゆめはくネットワーク」の整備、本館展示の新コンテンツ作成等を進めて行く必要があります、その策定や実施に努めて行きます。

5

マーケティング・マネジメント

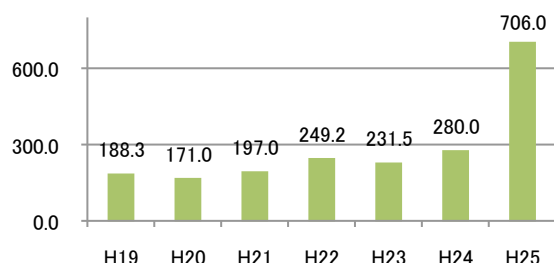
企画調整室

変化する社会に対応した効率的で健全な運営を行い、すべての県民に認知・利用される博物館をめざす。

1 情報発信

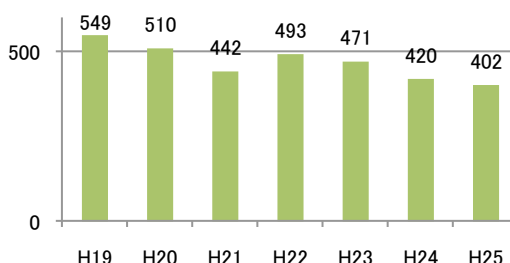
1-1. HP アクセス件数

中期目標 : 300 千件/年
平成 25 年度 : 706 千件 (235%)



1-2. メディア等出演・掲載回数

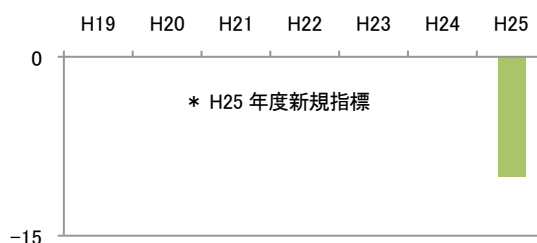
中期目標 : 500 回/年
平成 25 年度 : 402 人 (80%)



2 エネルギー使用量

電気・ガス・水道使用料の削減率

中期目標 : -15% (H24 年度比)
平成 25 年度 : -10% (67%)



平成 25 年度の達成状況と自己評価

ホームページのアクセスは、情報システム更新に伴う全般的な見直しにより、大きく伸びました。検索でヒットしやすい環境が整備されたと考えています。メディア等への露出件数は、ここ数年、漸減傾向となっています。恐竜化石発掘関連の報道が近年は多くなかったこと（丹波市で恐竜化石が発見され公表されたのは平成 18 年度でした）、平成 25 年度には研究員の転退職が相次いだことなどが、その要因ではないかと考えています。エネルギー使用量は、以前より積極的な削減につとめており、しだいに削減余地が少なくなっているものと思われます。

平成 26 年度の取組に向けて

情報システムの更新により見やすくなったホームページを活用し、さらに魅力的な情報提供につとめていきます。新聞社やテレビ局からの日常的な問合せにも丁寧な対応を心がけ、わかりやすい情報提供につとめます。引き続き、エネルギー使用量の適正化をはかります。